

研究プロジェクト

近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（美術史家）

■ポール・セザンヌと蒸気鉄道

本研究プロジェクトは、^{イコノロジー}図像解釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に近代技術的環境における心性の変容の影響を調査することを目的とする。2010年度は、近代技術による心性の変容の近代絵画への反映を総論的に分析した。2011年度は、特に個別研究としてポール・セザンヌ（1839-1906）への蒸気鉄道による視覚の変容の感化の問題を考察した。

■セザンヌが汽車から眺めた車窓風景

まず、フランスで初めて本格的に旅客用の蒸気鉄道が運行されたのは、セザンヌが生まれる2年前の1837年である。1842年には鉄道建設を法的に支援する「鉄道憲章」が制定され、第二帝政期（1852-1870）の間に首都パリと主要地方都市を結ぶほぼすべての幹線路線が整備されている。一方、セザンヌが最初に蒸気鉄道で長距離旅行したのは、22歳で故郷エクスからパリへ初上京した1861年である。それ以来、晩年までセザンヌは頻繁に蒸気鉄道を利用して、エクスとパリはもちろんフランス各地を転住する生活を送っている。したがって、セザンヌは蒸気鉄道による視覚の変容を自明的に感受し、肯定的に享受する最初の世代に属すと推定できる。

事実、セザンヌは1878年4月14日付エミール・ゾラ宛書簡で、疾走する汽車から眺めた車窓風景を次のように賛美している。「蒸気鉄道（le chemin de fer）でアレクシオン邸の傍を通過する時、東の方角に目の眩むようなモチーフが展開する。サント・ヴィクトワール山と、ポールクイユに聳える岩山だ。僕は、『何と美しいモチーフだろう（quel beau motif）』と言った」。

ここでセザンヌが賞賛しているのは、

エクス＝マルセイユ鉄道路線のアルク渓谷に架橋された鉄道橋を通過する時の車窓風景である。この手紙が書かれたのは、このエクス＝マルセイユ鉄道路線の開通（1877年10月15日）のわずか半年後である。また、セザンヌがモチーフとしてのサント・ヴィクトワール山に言及したのは実に40歳を目前にしたこの手紙が最初であり、この山を中心画題とする連作もこの手紙が書かれた1878年以後に開始されている。そして、セザンヌはこの連作にそのアルク渓谷の鉄道橋と汽車を描き込んでいる。つまり、セザンヌのサント・ヴィクトワール山連作は、このアルク渓谷の鉄道橋通過時の鉄道乗車視覚に触発されて開始された可能性が非常に高い（筆者が撮影した現場動画を参照。<http://www.youtube.com/watch?v=BAAAUOoEKPI>）。

■蒸気鉄道による視覚の変容

実際に、セザンヌの造形表現における10の様式的特徴は、蒸気鉄道による視覚の変容の様式的特徴と詳細に類似している。まず、「視点の複数化」と「対象の歪曲化」は、走行車内における視点の移動と、それによる視界の不明瞭化に呼応している。また、「構図の集中化」と「筆致の近粗化」は、汽車の車窓では遠景の対象ほど視野中央に長く留まり、近景の対象ほど視野外に素早く飛び去ることに対応している。さらに、「運筆の水平化」は、平行に逆走する車外風景や、横ぶれる車内状景における対象の残像現象に相応している。また、「前景の消失化」と「画像の平面化」は、乗客の風景からの視覚的疎外化に照応している。さらに、「形態の抽象化」と「色彩の純粋化」は、車輪線路と蒸気機関の抽象運動による視覚の単純化に一致している。そして、「共感の希薄化」は、鉄道旅行における

傍観者的感受性の胚胎と合致している。

これに関連して、ヴォルフガング・シヴェルプシュは『鉄道旅行の歴史』（1977年）で、鉄道乗車視覚と印象派的造形表現の類似性を主張している。現実には、セザンヌと交流のあった印象派のエドガー・ドガ（1834-1917）は、1892年に鉄道乗車視覚の影響を公言する風景画連作を制作している。「（その21枚の風景画は）今年の夏の旅行の成果です。私は列車の扉口に立ち、不明瞭に眺めていました。それが、私に風景画を描く着想を与えたのです」。

これらのことから、セザンヌやドガの絵画作品を、人類史的な近代技術による視覚の変容の美的・文化的・歴史的証言記録として再評価できる。なおこの場合、鉄道乗車中の車窓風景をそのまま描写するよりも、降車後の風景に蒸気鉄道による視覚の変容を適用して描出する方が、近代的視覚の内面化とその創造的昇華において芸術的重要性を持つと指摘できる。

■研究の成果

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて口頭発表を14件（学会12件、研究会2件）、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し4件）行った。また、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、研究成果の一部である『ポール・セザンヌと蒸気鉄道——近代技術による視覚の変容』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。